

「過去帳」分析システムの構築と活用

-大都市近郊農村における民衆の死亡地-

川口 洋 上原 邦彦 日置 慎治
帝塚山大学 経営情報学部

本稿では、「過去帳」分析システムを構築して、被葬者の死亡地について検討した。「過去帳」分析システムは、「過去帳」データベース、「過去帳」分析プログラム、および検索利用マニュアルから構成されている。本システムには、約3万1千人の被葬者が登録されており、46項目の人口学的指標を利用者側コンピュータにグラフ表示することができる。「過去帳」に戒名を付けて供養されている被葬者は、寺院周辺の在地で死亡した檀家の家族であると理解されている。しかし、武蔵国多摩郡下10ヶ寺の寺院「過去帳」を分析した結果、17世紀初頭から20世紀初頭まで他所死亡者は被葬者総数の数%にのぼり、死亡地は関東、東海、北陸、近畿、四国、九州にわたっていたことが判明した。

Death places of the peasants in the suburbs of Tokyo metropolitan area:
With the data analysis system for the Japanese Buddhist temple death registers

Hiroshi Kawaguchi Kunihiro Uehara Shinji Hioki
Faculty of Business Administration
Tezukayama University

We have constructed a database system for analyzing the Japanese Buddhist temple death registers which are called *Kako-Cho* (KC). The system is composed of the database of the KC data, programs for outputting the statistics of mortality and the manual for users. The URL of this system is <http://kawaguchi.tezukayama-u.ac.jp>. We have stored up approximately 31 thousand deaths in 12 Buddhist temples. We can provide 46 kind of demographic statistics concerning with mortality. With this system, we have investigated the death places of the peasants in *Tama* County, *Musashi* Province. We find that not few peasants died in many places far from their home villages after the beginning of the 17th Century.

1. はじめに

武蔵国多摩郡では、牛痘種痘法が1850年初頭に導入され、1860年代初頭には平野部に普及したと推定される[1]。筆者は、牛痘種痘法の普及が進んだ多摩郡などの地域では、天然痘による子供の死亡数が1860年代から減少したという作業仮説を提案した[2]。本研究では、この作業仮説を補強するため、18～19世紀の多摩郡における子供の死亡数を寺院「過去帳」から復原することを目指している。

従来の研究によれば、普通死亡率の低下と普通出生率の低下を両側面とするわが国における人口転換は、1920年代から本格化したと考えられている[3]。多産多死の伝統社会から少産少死の近代社会への移行、すなわち人口

転換の開始時期は、第一次世界大戦後と推定されている。こういった推論の根拠となったのは、明治中期から次第に整備されていった人口統計資料であった。先に述べた仮説を検証することができれば、わが国の人口転換に関する定説は再検討の必要に迫られる。

筆者は、作業仮説を検証するために、近代移行期における死亡者が記録されている寺院「過去帳」の内容を分析する「過去帳」分析システムを構築するとともに、史料に記録されている被葬者に関する理解を深めるための史料吟味を続けている[4]、[5]。前稿では、天然痘に罹患する可能性の稀な流産・死産児が戒名を付けて供養される習慣が定着した時期について検討した[6]。

牛痘種痘法導入期の寺院所在地における死亡数の時系列的变化を求める場合、在地で死亡した者と在地から遠く離れた他所で死亡した者を区別する必要がある。一般には、寺院周辺に住む檀家の家族が死亡すると、葬送儀礼を経て「過去帳」に戒名を付けて記録され、供養が行われると理解されている。しかし、民衆の死亡地に関する先行研究は皆無とみられる。本稿では、寺院「過去帳」に記録されている被葬者の死亡地について検討する。

2. 寺院「過去帳」の記録内容

寺院「過去帳」は、近代移行期の人口現象を復原するうえで、「宗門改帳（しゅうもんあらためちょう）」と並ぶ基礎的史料である。「宗門改帳」の作成は明治3（1870）年で終了するのに対して、寺院「過去帳」は幕末維新期を挟んで死亡者を記録し続けている点でことに貴重である。

筆者が調査した12カ寺の寺院「過去帳」には、被葬者を①死亡日順に記録した「日繰り」、②死亡年月日順に記録した「年繰り」、③家族（世帯）ごとに記録した史料の3種類が確認できる。次に示す図1は、②の「年繰り」方式による「過去帳」の書式例である。

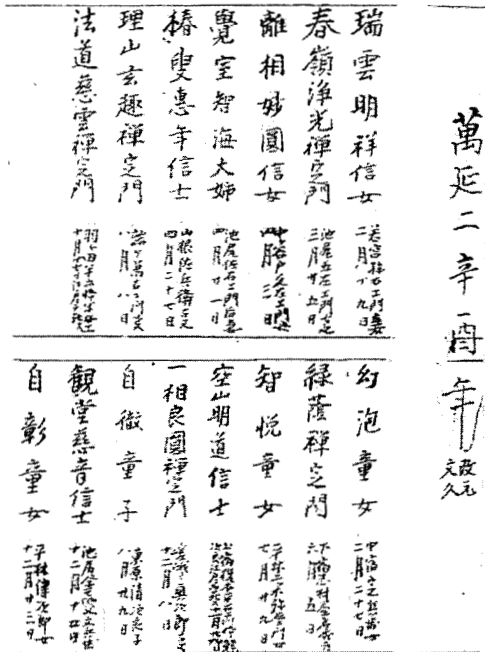


図1 武蔵国多摩郡千カ瀬村D寺「過去帳」

原則として寺院「過去帳」には、被葬者の戒名、俗名（喪主との続き柄）、および死亡年月日が記録されている（図1）。なかには、被葬者の死亡年齢、居住地の小字名、死因、死亡地、出身地、生年月日などが詳細に書き残されている「過去帳」も確認できる。

3. システム構築の意義

近年著しい展開をみせている歴史人口学の分野では、「宗門改帳」の分析事例は急増している。しかし、寺院「過去帳」を用いた研究は1980年代以降、逆に減少している。その要因として、①史料整理に膨大な作業量が必要である、②人権問題などのために史料収集が至難である、③史料の性格が未解明であるといった点が指摘できる。

本研究で構築中の「過去帳」分析システムは、①に関して史料読解から人口学的指標の算出に至る研究過程の短縮を図るだけでなく、「過去帳」から死亡統計を求める研究過程の再現性を保障するとともに、文字データとして「過去帳」の保存を図り、研究者間における史料と分析方法の共有を目指している。

②についても、本システムに史料を蓄積する作業は、関係各寺院の理解のもとに、今後とも順調に進展すると思われる。

③に関して、「過去帳」の記録内容を分析するには、史料の作成年代や作成者などを特定する書誌学的検討、寺檀関係の解明、および「宗門改帳」や墓碑銘といった関連史料との比較対照が不可欠である。「過去帳」の史料性格を十分吟味せずに統計分析の手法を適用することは、絶対に避けるべきである。

「宗門改帳」とは異なり、寺院「過去帳」から檀家の総人口や性別・年齢別人口といった人口分析に不可欠な at risk population を求めることはできない。そのため寺院「過去帳」を用いて死亡数の時系列的变化などを追跡するには、檀家数や檀家の分布、戒名をつけて葬られた被葬者の性格などを慎重に吟味する必要がある。

本稿では、寺院所在地における死亡数の変化を復原するための基礎的作業として、「過去帳」分析システムに蓄積された武蔵国多摩郡下10カ寺の史料を用いて、在地から遠く離れた他所で死亡した民衆の実態を解明する。具体的には、死亡地の分布、他所死亡者の戒名の位号、他所死亡者の死亡月について検討したい。

4. 「過去帳」分析システムの概要

4. 1. 開発環境と構成

現在構築中の「過去帳」分析システムを含む「江戸時代における人口分析システム (DANJURO ver.4.0)」は、HP PROLIANT ML310 をウェブ・サーバ機、HP PROLIANT ML330 をデータベース機として構築されている。WINDOWS 2000 と 2003 を OS、ORACLE Internet Application Server 9.0.2 を Web Server、ORACLE Database 9.2.0 を DBMS として開発、運用されている。

他方、本システムを利用するには、利用者側コンピュータに Microsoft Internet Explore 6.0、Netscape Navigator 7.0 といったブラウザ、および Microsoft Excel 2000 以上を準備する必要がある。

DANJURO ver.4.0 の URL は次に示される。<http://kawaguchi.tezukayama-u.ac.jp> 本システムは、「宗門改帳」分析システム、「過去帳」分析システム、「幕末維新期人口史料」分析システム、古文書文字の認識、研究費・研究成果、および関連サイトへのリンクから構成されている。

入口ページと利用規定に続いて、インデックス・ページが表示される (図 2)。本システムでは、二重の認証画面を設けることにより、利用登録をした研究者以外の利用を制限している。

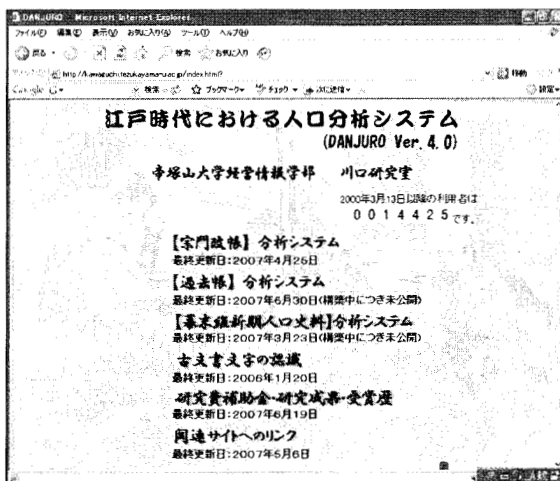


図 2 江戸時代における人口分析システム (DANJURO ver. 4.0) のインデックス・ページ

「過去帳」分析システムは、「過去帳」データベース、「過去帳」分析プログラム、および検索利用マニュアルから構成されている。

4. 2. 「過去帳」データベース

「過去帳」データベースには、武蔵国多摩郡、美作国真庭郡、および備後国御調郡に立地する 12 カ寺の約 3 万 1 千人にのぼる被葬者が登録されている (表 1)。次に示すデータ項目のうち、下線を引いたものが数値データ、それ以外は文字データである。

表 1 「過去帳」データベースに登録されている被葬者

集落名	現在地	寺院名	死亡年	被葬者数 (人)
武蔵国多摩郡川崎村	東京都羽村市	A寺	1736-1910	2,608
武蔵国多摩郡下石原宿	東京都調布市	B寺	1579-1910	1,631
武蔵国多摩郡五日市村	東京都あきる野市	C寺	1278-1910	2,542
武蔵国多摩郡千ヶ瀬村	東京都青梅市	D寺	1786-1910	2,207
武蔵国多摩郡打越村	東京都八王子市	E寺	1494-1910	2,045
武蔵国多摩郡羽村	東京都羽村市	F寺	1646-1910	2,413
武蔵国多摩郡日野宿	東京都日野市	G寺	730-1910	4,939
武蔵国多摩郡羽村	東京都羽村市	H寺	1683-1910	2,906
武蔵国多摩郡福島村	東京都昭島市	I寺	1364-1910	2,491
美作国真庭郡新庄村	岡山県真庭郡新庄村	J寺	1653-1910	3,862
武蔵国多摩郡横沢村	東京都あきる野市	K寺	1550-1804, 1889-1910	2,601
備後国御調郡三庄村	広島県因島市	L寺	1829-1863	709
合計				30,954

寺院「過去帳」テーブル…寺院所在地，寺院名，宗教・宗派，史料名，死亡年（西暦），死亡年月日（旧暦），死亡年月日（新暦），戒名，性別，小字名，俗名，死亡年齢，出生年（西暦），生年月日（旧暦），生年月日（新暦），死因，死亡地，出身地。

「過去帳」データベースは，検索条件入力画面，検索結果のブラウジング画面，被葬者の詳細情報表示画面，download 項目の選択画面，および download の実行画面から構成されている。

4. 3. 「過去帳」分析プログラム

「過去帳」分析プログラムを用いて，以下46項目の人口学的指標を算出して，利用者側コンピュータにグラフ表示することができる。

- ①被葬者数に関する指標…男女別被葬者数，男性被葬者数，女性被葬者数，被葬者の性比，日別男女別被葬者数，日別男女別死亡指数，日別被葬者の性比。
- ②年齢別死亡構造に関する指標…戒名の位号の出現頻度，戒名の位号の構成比，死亡年齢と戒名の位号（全体），死亡年齢と戒名の位号（子供），死亡年齢と戒名の位号（成人），死亡年齢と戒名の位号（出家など），戒名の位号別被葬者数（子供），戒名の位号別被葬者数（成人），戒名の位号別被葬者数（出家など），年齢階層別被葬者数，子供の被葬者数，成人の被葬者数，年齢階層別被葬者の性比。
- ③死亡の季節性に関する指標…月別男女別被葬者数，月別男女別死亡指数，月別被葬者の性比，月別年齢階層別被葬者数，月別年齢階層別死亡指数，月別年齢階層別被葬者の性比，季節別男女別被葬者数，季節別男女別死亡指数，季節別被葬者の性比，季節別年齢階層別被葬者数，季節別年齢階層別死亡指数，季節別年齢階層別被葬者の性比。
- ④死因などに関する指標…死因が記録されている被葬者数，死因が記録されている被葬者数の構成比，男女別流産・死産児数，戒名の位号別流産・死産児数，死亡地が記録されている被葬者数，死亡地が記録されている被葬者の構成比，出身地が記録されている被葬者数，出身地が記録されている被葬者の構成比，出生年が記

録されている被葬者数，出生年が記録されている被葬者の構成比，死亡年月日が記録されている被葬者数，死亡年月日が記録されている被葬者の構成比，死亡年齢が記録されている被葬者数，死亡年齢が記録されている被葬者の構成比。

「過去帳」分析プログラムは，人口学的指標選択画面，データ検索画面，およびデータの download 画面から構成されている。利用者側コンピュータに指標をグラフ表示するには，Microsoft Excel のグラフ作成用マクロファイルとデータファイルの両者をダウンロードする必要がある。

5. 被葬者の死亡地

5. 1. 他所死亡者の死亡地の分布

表2から表11は，死亡地が記録されている被葬者を50年ごとに整理したものである。多摩郡下の寺院「過去帳」に記録された被葬者の死亡地は，多摩郡の周辺村落にとどまらず，江戸をはじめ，上野国，上総国，安房国，甲斐国，相模国，伊豆国，遠江国，越後国，越前国，近江国，山城国，大和国，阿波国，伊予国，土佐国，豊後国，肥前国，対馬国といった広範囲にわたっている。

他所死亡者は，被葬者総数の0~4.6%を占めている。表10などから確認できるように，他所死亡者は17世紀初頭から20世紀初頭まで継続してみとめられる。時代が下るとともに他所死亡者の増加が確認できるのは，表2の下石原宿B寺，表4の日野町G寺，表7の羽村F寺にとどまる。この3カ寺以外の「過去帳」には，17世紀から20世紀まで他所死亡者の顕著な増加傾向はみとめられない。そのため，寺院「過去帳」に他所死亡者の死亡地が漏れなく記録されていると判断することはできない。

「過去帳」には，17世紀初頭から江戸（東京）で死亡した者が相当数記録されている。1760年から1909年にいたる150年間に江戸（東京）で死亡した者の人数は，江戸城から約22km離れた石原宿B寺では10人，約42kmの西にある羽村では8人，約48km離れた五日市C寺では20人である。江戸城からの直線距離と江戸で死亡した者の人数との相関は低いと予測される。これは，寺院「過去帳」に江戸で死亡した者が漏れなく記録されている可能性が低いことを示唆している。

表2 武蔵国多摩郡下石原宿(現、調布市)B寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	285人(男性134人、女性151人)	384人(男性193人、女性188人、性別不明3人)	469人(男性243人、女性225人、性別不明1人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(首座、檀士、信女各1人) 豊後国(藏主1人)	江戸(信士1人)	江戸ノ東京(居士1人、信士3人、信女2人) 長崎(居士1人) 国分寺村(童女1人) 清国旗原(童女1人) 旗行中(居士1人) その他(禪定門、童子各1人)

表3 武蔵国多摩郡福嶋村(現、明島市)D寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	483人(男性295人、女性218人)	466人(男性227人、女性241人)	666人(男性336人、女性325人、性別不明69人)
他所死亡者(成名の位号)	上野国草津(禪定門2人) 大神(信女1人) 死忌不知(禪定門1人) その他(禪尼1人)	江戸(信士1人、信女1人) 三ヶ嶋(信女1人) 田村安養寺(禪者1人) 小野路(禪尼1人)	八王子(禪定門1人) 日野町(居士1人) 玉川(信女1人) 台湾新路(信士1人) 清国(居士1人)

表4 武蔵国多摩郡日野町(現、日野市)G寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	1002人(男性515人、女性478人、性別不明9人)	897人(男性470人、女性419人、性別不明8人)	1135人(男性576人、女性491人、性別不明69人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(信士1人、信女2人) 下宿(信士1人) 中宿(信士1人) 玉座(居士1人)	当所(禪定門1人)	江戸ノ東京(居士2人、信士1人、禪定門1人、童子1人) 横浜(居士、禪定門各1人) 横丁(信女1人) 当宿(禪定門1人) 清国旗原(居士2人) 清国田嶋屯(居士1人) その他(禪定門3人)

表5 武蔵国多摩郡鉢越村(現、八王子市)E寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	432人(男性217人、女性213人、性別不明2人)	476人(男性270人、女性204人、性別不明2人)	590人(男性297人、女性290人、性別不明3人)
他所死亡者(成名の位号)	京(居士1人)	江戸(居士2人) 豊後国(首座1人) その他(信女1人)	

表6 武蔵国多摩郡川崎村(現、羽村市)A寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	827人(男性432人、女性389人、性別不明6人)	599人(男性318人、女性278人、性別不明3人)	697人(男性351人、女性329人、性別不明17人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(居士1人、禪定門2人、信女1人、禪定尼1人) 上野国(居士1人) 他国(禪者1人) その他(信女1人)	江戸(居士1人、禪定門3人、信女2人) 甲斐国(禪定尼1人) 旗先(禪定門1人) 他所(居士1人) その他(禪者1人)	東京(居士、禪定門各1人) 横浜(居士1人) 保土ヶ谷村(禪門1人) 八王子(信女1人) 五日市(禪門1人) その他(禪者1人、禪定門1人)

表7 武蔵国多摩郡羽村(現、羽村市)F寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	539人(男性269人、女性268人、性別不明2人)	430人(男性206人、女性224人)	669人(男性327人、女性342人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(禪定門2人、法尼1人)	江戸(禪定門1人)	東京(禪定門1人) 上野国(信女1人) 上野国(上座1人) 調布村(信女1人) 千ヶ嶋村(禪定尼1人) 鹿川村(信女、信女各1人) 美教菴村(禪定門1人) その他(信士、禪定門各1人)

表8 武蔵国多摩郡羽村(現、羽村市)H寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	697人(男性383人、女性333人、性別不明1人)	749人(男性387人、女性362人)	1102人(男性606人、女性495人、性別不明17人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(居士2人、信女1人) 三嶋(信士1人)	江戸(信士2人、禪尼1人) 八王子(禪定門1人) 上野国(居士1人)	東京(和向、信女各1人) 相模国(禪定門1人) 台湾(居士1人) その他(信士1人、禪定門2人)

表9 武蔵国多摩郡千ヶ瀬村(現、青梅市)D寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	2人(男性2人)	896人(男性435人、女性459人、性別不明2人)	1270人(男性656人、女性612人、性別不明2人)
他所死亡者(成名の位号)		江戸(信士1人、禪定門2人、大姉1人)	江戸(居士、禪定門各1人) 所沢町(禪定門1人) 身延(禪定門1人)

表10 武蔵国多摩郡積沢村(現、あきる野市)K寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1610-1659	1660-1709	1710-1759
被葬者数	312人(男性205人、女性106人、性別不明1人)	475人(男性277人、女性198人)	667人(男性371人、女性294人、性別不明2人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(禪定門1人) 遠江国(居士1人) 尾形国(居士2人) 土佐国(信女1人) 京都(法印1人) 石山(禪定門1人) 対馬国(律師1人)	江戸(居士1人、信士2人、信女1人、釈尼1人、善女1人) 尾戸国(信女1人) 長谷寺(法印1人) 伊勢参宮道中(信男1人) 崎西(法印1人) その他(法印1人)	江戸(居士2人、信士2人、尼師1人、信女8人、童尼1人、善女1人、童女2人) 立川村(大姉1人) 溝尾村(大姉1人) 三田村(沙彌1人) 石川村(法師1人) 世田谷村(信女1人) 安房国長妻藤(信士1人) 京都(御蘭製1人) 石山(居士1人) 長谷寺(法印1人、阿蘭製1人) 大和国(信士1人、信女1人) その他(信士1人、信女1人)

表11 武蔵国多摩郡五日市村(現、あきる野市)C寺「過去帳」に記載されている被葬者の死亡地			
死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	584人(男性302人、女性281人、性別不明1人)	496人(男性260人、女性236人)	645人(男性343人、女性302人)
他所死亡者(成名の位号)	江戸(信士2人、禪定門1人、信女2人) 安下村(信女1人) 福原村(御蘭製1人) 平井村(童女1人) 大久野村(釈尼1人) 旗銀村(和上1人) 小倉村(公座1人) 八王子(信士1人) 阿波国(信士1人) 長谷寺(権大僧都2人) その他(法師2人、信女1人)	江戸(居士2人、信士6人、信女1人、禪定尼1人) 独父(信女1人) その他(信士2人、禪定門1人)	江戸ノ東京(居士2人、信士1人) 伊予国松山(信士1人) 越後国(信士1人) 伊豆国(居士1人) 清国(居士4人) その他(禪者1人、大姉1人)

19世紀末になると、清国や台湾で戦死した被葬者が確認できる。日清戦争や日露戦争などの対外戦争により、村の若者が国外で死亡する事態が生じた。この時、戦死・戦病死者に居士号を付けるよう、本山から末寺に指示が出された。そのため、戦死・戦病死者に忠山良勇居士や禪棟院義邦良忠居士といった、明治中期までに類例を見ない戒名を付けて故人を顕彰するという新たな習慣が生れた。

5. 2. 他所死亡者の戒名の位号

他所死亡者に付けられた戒名の位号は、女孩、童子、童女、禪定門（禪門）、禪定尼（禪尼）、信士、信男、信女、善女、居士、大姉、禪者、法尼、釈尼、靈尼、上座、首座、蔵主、沙彌、法師、法印、公座、和尚、律師、阿闍梨と多岐にわたっている（表12）。

戒名の位号などから判断できる他所死亡者の性別は、男性141人、女性59人である。他方、戒名の位号から判断できる他所死亡者の年齢階層は、子供10人、成人172人、俗人を除いた出家などが18人である。女性や子供のなかにも、在地から遠く離れた他所で死亡した者が相当みられることは、とくに注目される。

居士や大姉といった戒名の位号を持つ者も28人確認できるため、村落上層にも他所死亡者がいたと推測できる。

5. 3. 他所死亡者の死亡月

表13によれば、他所死亡者の死亡月（新暦）は分散している。7月、8月、9月の夏季における他所死亡者数は他の月に比べるとやや多く、逆に12月、1月、2月の冬季における他所死亡者数はやや少ない。

次節で述べるように、他所死亡者の遺骸は、原則として在地まで運ばれて埋葬された。腐敗の速度が速い夏季に、他所死亡者の記録が多いのは、近代化以前の伝統社会における死亡の季節性を反映した傾向と推測される[7]。

6. 他所で死亡した場合の葬送事例

他所死亡者は、どのような状況で在地から離れた他所で死亡して、在地に近い檀那寺の「過去帳」に記録されたのか、寺院「過去帳」から他所死亡者の置かれていた状況を追うことはできない。本節では、日記に記録された記事を検討することにより、他所死亡者の具体像に接近を図りたい。

史料Aによれば、中藤村の自宅から75km近く離れた箱根底倉温泉で死亡した場合でも、遺骸を早駕籠に乗せて自宅まで運び、葬式が行われた。史料Aや史料Bのようにコレラや麻疹などの感染症で死亡した場合、史料Cのように、水死したため遺体の損傷がひどいと推測される場合でも、遺骸を自宅まで運び、葬式をあげた。19世紀前期の多摩郡に居住した民衆が著した日記は、他所死亡者の遺骸を多摩郡の在地に運び、在地で葬式を行なうのが原則であったことを示唆している。

史料A（武蔵村山市教育委員会『指田日記（多摩郡中藤村）』1994, p.336）

文久二年八月六日 箱根底倉温泉ヨリ、佐右衛門急病ノ飛脚来ル。

同七日 佐右衛門、相州温泉ニテ暴瀉病ニテ死シ、ハツ時、存生ノ体ニシテ籠舁五人ニテ佐右衛門宅ニ舁入ル。此節府内コロリ名付、ヤミ付ト即日死ス、五ヶ年以前流行ノ時ヨリ急速ニ死ス。

同八日 佐右衛門送葬。

史料B（白石通子・小林博子『鈴木藤助日記二（橋樹郡長尾村）』2003, p.60）

文久二年七月十一日 隣郡次郎伴八十吉はしかにて江戸にて死去致し候趣、迎ひニ参り候処、手前にては、病人其外にて無人致、申訳いたし参り不申候。

表12 他所死亡者の戒名の位号

	被女	嬰女	童子	童女	禪定門(禪門)	禪定尼(禪尼)	信士(信男)	信女(善女)	居士(大姉)	禪者	法尼(釈尼、靈尼)	上座	和尚など
下石原宿B寺(1760-1909)	0	0	1	2	1	0	5	3	3	0	0	0	2
福嶋村I寺(1760-1909)	0	1	0	0	3	2	2	3	2	0	1	0	0
日野町G寺(1760-1909)	1	0	1	0	7	0	4	2	7	0	0	0	0
打越村E寺(1760-1909)	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	1
川崎村A寺(1760-1909)	0	0	0	0	10	2	4	5	2	0	3	0	0
羽村F寺(1760-1909)	2	0	0	0	6	1	1	2	0	0	0	1	1
羽村H寺(1760-1909)	0	0	0	0	4	1	7	2	1	0	0	0	0
千ヶ瀬村D寺(1786-1909)	0	0	0	0	5	0	2	0	0	1	0	0	0
横沢村K寺(1610-1804)	0	0	0	2	2	0	11	17	4	1	2	0	11
五日市村C寺(1760-1909)	0	0	0	0	2	1	13	3	8	1	1	0	0
合計	3	1	2	4	40	7	51	38	28	3	5	3	14

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
下石原宿B寺(1760-1909)	2	3	1	0	0	1	2	1	0	1	4	1
福嶋村I寺(1760-1893)	0	0	2	2	0	0	0	1	5	2	3	0
日野町G寺(1760-1909)	3	1	3	2	1	0	3	5	1	2	0	0
打越村E寺(1760-1909)	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1
川崎村A寺(1760-1909)	2	3	1	3	2	1	6	0	3	0	2	3
羽村F寺(1760-1909)	2	0	1	2	1	0	2	0	3	1	1	1
羽村H寺(1760-1909)	1	2	0	3	0	2	4	1	0	1	2	0
千ヶ瀬村D寺(1786-1909)	0	0	0	0	0	2	0	2	1	0	1	2
横沢村K寺(1610-1804)	3	4	8	6	4	4	11	7	7	11	4	2
五日市村C寺(1760-1909)	2	0	5	3	2	0	2	5	5	3	2	1
合計	16	13	21	21	12	10	30	22	25	21	20	11

史料 C (武蔵村山市教育委員会『指田日記 (多摩郡中藤村)』1994, p. 298)

安政六年六月八日 萩ノ尾利左衛門養女、
 熊川村ニ奉公ニ位セ置ケルガ、十九才ニテ
 水ニ入テ死ス、高井戸ヨリ引取、今日葬ル。

寺院「過去帳」に相当数記録されていた江戸で死亡した多摩郡の民衆の姿を追うために、以下の史料を検討した。まず史料 D は、江戸の奉公先で麻疹のために死去した娘の遺骸を引き取り、在地で葬式をあげた事例である。つぎの史料 E は、江戸で古道具屋の商売をしていた中藤村の元里正(名主)が、江戸で死亡したために中藤村にある本宅に遺骸を運び葬式をあげた事例である。江戸と中藤村で二重生活をしていた史料 E と類似の事例が『指田日記』には合計 3 例確認された。

史料 D (国文学研究資料館『史料叢書 5 農民の日記 (多摩郡連光寺村)』名著出版, 2001, p. 126)

文久二年七月五日 昨日、馬曳沢文太郎娘
 麻疹ニ而江戸奉公先ヨリ死去致し、引取、七
 日葬候由、組頭七歳方ヨリ届来。

史料 E (武蔵村山市教育委員会『指田日記 (多摩郡中藤村)』1994, p. 349)

文久三年九月廿七日 戸端里正隠居、先年
 より数年、江戸ニテ古道具屋シ居ラレケル
 所、江戸ニテ病死ニヨリ、中藤本宅ニ引取、
 同廿九日 戸羽葬式、保十郎本寺ヨリ頼ミニ
 付侍侍。

江戸時代における村落から巨大都市に向かう人口移動の多くは、年季奉公を目的とした村落下層であったと推測されている。史料 E のような村落最上層による都市村落間の二重生活を示す史料の報告例は稀である。寺院「過去帳」から判明した民衆の死亡地は、大都市近郊村落における民衆の日常生活交渉空間が江戸を中心として広範におよんでいたことを示唆している。

7. おわりに

本研究では、1850年代から牛痘種痘法の導入が始まった武蔵国多摩郡では、天然痘による子供の死亡数が1860年代から減少したという作業仮説を検証するため、在地で死亡した子供の数の時系列的变化を寺院「過去帳」から復原することを目指している。「過去帳」に戒名を付けて供養されている被葬者は、寺院周辺に住み、在地で死亡した檀家の家族と理解されている。しかし、近代移行期における民衆の死亡地に関する知見は、管見の限り得られていない。

本稿では、まず寺院「過去帳」から人口学的指標を算出する研究過程を自動化するために「過去帳」分析システムを構築し、このシステムを活用して武蔵国多摩郡に立地する10カ寺の寺院「過去帳」に記録されている他所死亡者について検討した。

検討の結果、被葬者の死亡地は17世紀初頭から関東、東海、北陸、近畿、四国、九州の広範囲にわたっていることが確認された。他所死亡者の戒名の位号、性別、年齢階層、および死亡月は分散している。19世紀の民衆

が著した日記によれば、他所死亡者の遺骸は在地に運ばれ、在地で葬式があげられるのが原則であったと推測される。

「過去帳」には、17世紀初頭から20世紀初頭まで江戸（東京）で死亡した者が多数記録されている。民衆の日記には、江戸で病死した年季奉公人のほかに、江戸で古道具屋を開いていた元名主が病死した事例もみられた。こうした事例は、江戸と近郊村落で二重生活をおくる村落最上層の姿を髣髴とさせる。寺院「過去帳」から復原することのできる他所死亡者の存在は、大都市近郊村落における民衆の日常生活交渉空間が想像以上に広範におよんでいたことを示唆している。

今後の課題として以下の点が残されている。

- ①「過去帳」データベースの規模拡大。
- ②「過去帳」分析プログラムの充実。
- ③「過去帳」に記録されている他所出身者、あるいは他所に居住する被葬者の実態解明。
- ④19世紀の民衆が著した日記による死亡状況の実態解明。

謝辞

本研究には、2006～2008年度・科学研究費補助金・基盤研究C（課題番号：185000198、研究課題：近代移行期における親族関係分析システムの構築、研究代表者：川口洋）、2006・2007年度・日本私学振興共済事業団・学術研究振興資金（研究課題：「幕末維新时期人口史料」分析システムの構築、研究代表者：川口洋）、および2006・2007年度・帝塚山大学・特別研究費の補助を受けた。貴重な史料の閲覧を快諾された寺院には、改めて深謝申し上げたい。

参考文献

[1] 川口洋：牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡による疾病災害，歴史地理学，Vol.43, No.1, 2001, pp.47-64.

[2] Kawaguchi Hiroshi: From the faith cure activities to the vaccination, the first step to the decrease of the child deaths in the 19th century, Japan, paper prepared for the Sixth European Social Science History Conference in Amsterdam, the Netherlands, 2006.

[3] 伊藤繁「戦間期の日本人口」（日本人口学会編『人口大辞典』培風館，2002，p.109）。

[4] 川口洋・上原邦彦・日置慎治：寺院「過去帳」データベースの構築，情報処理学会：人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，2004，pp.59-66.

[5] 川口洋『平成15～17年度 科学研究費（基盤研究C）研究成果報告書 寺院「過去帳」分析システムの構築』2006，帝塚山大学経営情報学部川口研究室，190頁。

[6] 川口洋・上原邦彦・日置慎治：「過去帳」分析システムを用いた史料吟味，情報処理学会：人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，2006，pp.101-108.

[7] 鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所，2007，pp.114-117.